

B久原正治 立命館アジア太平洋大学経営大学院教授

BOOKS

和魂洋才

夏目漱石は明治三三年正岡子規に宛てた手紙で次のように書いている。
「日本にそれほど好著のあるを打ち捨て、わざわざ洋書に一つを抜き候事馬鹿馬鹿しき限りに候」。

本欄は経営関連の洋書と和書を比較紹介することを目的としている。読者は特に米国の経営書を読み進むにつれ、そこに書かれた内容が特殊米国の制度や環境を背景に考えられたものであることに気付く、それをそのままカタカナ語にして紹介しありがたく奉る日本の経営コンサルタントや学者達の言動に疑問を持つことが多くなってくるのではないだろうか。我々は米国外から輸入する経営の考え方の背後にある特異性を十分に理解しなければ、漱石の言う洋書に一つを抜けば、馬鹿に過ぎなくなる。

は欧米企業で長年勤務した著者が米国の取り入れる制度や仕組みが米国独自の思考のメカニズムをベースに確立されたもので、日本が参考にするべきものとは程遠いものであることを経験を通して明らかにしていく。米国は相互契約に基づく信頼をベースとした現実主義的な理念社会であって、厳密な制度重視による迅速かつ明確な意

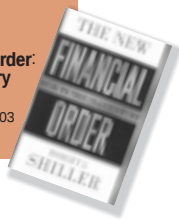
思決定で不確実環境下のコスト最小化を目指す。著者は、日本が確実な環境下での運用の強みを基礎とする社会であり、米国型とはその社会の仕組みを全く異にすることを強調する。日本が目指すのは、米国型の自律した個人



日本の改革の探求
—グローバル化への処方箋—
小笠原泰
日本経済新聞社
2003年6月

ベースの成果主義の社会などではなく、現在の不確実な環境を日本型が強みとする確実で長期的に安心ができる環境に変えていくものであること。日本のリーダは現在の制度や仕組みを破壊するのではなく、不確実性を高

めないようにすべきである」と提案する。
は前著、根拠なき熱狂 (Rational Exuberance) で、ITバブルの崩壊をいち早く予言したハーバード大学の有名な経済学者、シャーの近著である。金融理論の体系を用い、これまでのリテラ



The New Financial Order:
Risk in The 21st Century
Robert Shiller
Princeton University Press, 2003

体系を大きく変えるような長期的な経済リテラを担保する私的保険の仕組みを提起する。長期的な経済リスクとは、例えば選択した職業が経済構造の変革により不要となり、金銭的な報酬が大幅に減少するようなり

スワグのことである。破壊的創造を宿命とする資本主義の持つ本質的なリスクを担保する保険ができれば、人々は安心して生計を立てることができる。著者の考えは壮大で独創的である。その根本にあるのは、いかにして米国型資本主義の不確実性を社会全体の安心に変えていくかに、これまでにあった。

考えてみれば、これまでの日本は、長期の取引、終身雇用、マイバグ制度あるいは地域の相互扶助などで大きな社会的リスクを担保し、安心社会を築いてきた。銀行や保険会社は絶対につぶれないことがこのような安心の基本であった。しかし現在の日本では、米国外から輸入された経営や経済の考え方を無批判的に導入し、営々と築き上げた安心社会を破壊して、不確実な環境の中に人々を送り込もうとしている。それに代わる安心の仕組みがないことは、全体として人間の行動心理を非常に臆病でリスクを取らないものに変わってしまった。一方の不確実で創造的破壊を原理とする米国の社会では、著名な学者が社会全体の安全網を目指す壮大な私的保険の制度的な枠組みの考えを提示している。この二冊を読み比べて、漱石の文頭の言葉が身にしみるのは筆者だけであろうか。